

# 幼児の情動状態の表現に関する研究 色による表現と言語による表現について

著者	本郷 一夫, 松本 恵美, 山本 信, 中舘 和子, 阿部和海
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	66
号	2
ページ	129-139
発行年	2018-06-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00123161">http://hdl.handle.net/10097/00123161</a>

# 幼児の情動状態の表現に関する研究

—色による表現と言語による表現について—

本郷 一夫\*  
松本 恵美\*\*  
山本 信\*\*\*  
中舘 和子\*\*\*\*  
阿部 和海\*\*\*\*

本研究は、5歳児20名を対象として、色と言語を用いて情動を表現する保育活動の中で、幼児の情動表現がどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とした。その結果、(1)5歳児は、ネガティブな情動と比べ、ポジティブな情動に関する表現が多いことが示された。(2)5歳児は、明るい色ではポジティブな情動、暗い色ではネガティブな情動を表現することが多いが、明確な色-情動の対応関係はなく、単純に好きな色を使って表現することも多いことが分かった。(3)情動を表現する保育活動を通して、5歳児は、情動が生じる背景や理由を言語によって表現する能力を獲得していることが示唆された。

キーワード：言語による情動表現、色による情動表現、情動の生じた背景・理由、幼児

## I. 問題と目的

これまで、色に対する情動反応の研究は数多くなされてきた。たとえば、赤色は興奮、緑色は平穩、黒色は絶望を連想させ、また、明るい色はポジティブな情動、暗い色はネガティブな情動を喚起させやすいという結果が、多くの研究から得られている(Boyatzis & Verghese, 1994)。これらの色-情動の対応関係は、臨床現場において、患者が描いた絵から情動状態を推測するための判断材料として用いられ、また、自閉スペクトラム症者の他者情動認識支援に用いられ、といった試みがなされている(黒木・長井・堀井・池田・熊谷・浅田, 2015)。しかし、特に幼児に関しては、研究によって、特定の情動と特定の色との対応関係について異なる結果も確認されている。Boyatzis & Verghese (1994)は、5, 6歳児において、赤色や桃色などの明るい色ではポジティブな言語表現、黒色や灰色など暗い色ではネガティブな言語表現が見られることを示し、Zentner (2001)では、3歳児でも特定の色と特定の表情図を関連づけることが可能であるという結果が得られてい

---

\*教育学研究科 教授  
\*\*教育学研究科 博士課程後期  
\*\*\*教育学研究科 博士課程前期  
\*\*\*\*西多賀チェリー保育園

る。しかし、Crawford, Gross, Patterson, & Hayne (2012) や中道・小野寺(2017)では、幼児・児童の7, 8割が、「幸せな絵」と「悲しい絵」を描くときに、単に好きな色を用いて絵を描いているという結果から、臨床現場において、子どもの絵に使用されている色から情動を推測しようとする際には注意が必要であると主張している。

これらの結果のばらつきは、研究方法の違いによる影響もあると考えられるが、このばらつきを単に、「色-情動の対応関係の相違」として見るのではなく、「色というものを通じて、幼児が自分の情動状態をどのように理解・表現するのか」という視点を持って解釈していくことも重要である。幼児期の情動発達に関して、Saarni, Campos, Camras, & Witherington (2006)は、情動コンピテンズ(情動的なやりとりの中で個人が望んだ結果を達成するための能力やスキル)として、「自分の情動状態に気づく能力」「一般的に用いられている情動語や情動表現を使う能力」を挙げている。このうち、言語による情動表現に関しては、従来は、言語の発達とともに自分の要求を言葉で伝えられるようになることが、感情や行動のコントロールにつながると考えられていた。しかし、本郷・飯島・平川(2010)は、言語的な情動表現の発達が進んでいるほど、攻撃的・乱暴な言葉を言うなど、不適切な情動表現が増え、その場合に対人的トラブルが増えることを明らかにしている。本郷らのこの結果は、情動の表現に関して、単純な言語の発達が円滑な対人関係の構築につながるわけではないということを示しており、情動を適切に表現するということが重要であるということを示唆している。

また、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」においても、経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現する中で、自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わうことは重要であるとされている。本郷・大淵・松本・山本・小玉(2017)が、情動を日常的に表現する活動を取り入れている保育所の子どもが、情動が生じる背景を言語によって説明する能力を獲得しているという結果を得るように、日々の生活の中で、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うことは重要であると考えられる。しかし、実際の保育の現場で行われている様々な活動の中で、子どもたちがどのように自分の経験や情動を表現しているのか、どのような活動が幼児の情動表現の発達を促すのかに着目した研究は未だ少ない。

以上の点から、本研究では、情動を表現する保育活動の中で、幼児の情動表現がどのように変化していくかということ明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ. 方法

1. 対象：5歳児20名(男児11名, 女児9名)
2. 調査時期：2016年5月～2017年2月に、週3回程度、A 保育所の保育室において、朝のお集まりの時などに実施した。
3. 調査内容および手続き：

### (1)色を用いた表現

子ども一人一人に10センチ四方の紙を一枚ずつ配り、その日の気持ちに合う色を、市販の16色の

クレパスの中から選んでもらい、紙を塗るよう促した。活動を行った回数は月によって異なるため、本研究では、各月にそれぞれの子どもが描いた最初の3枚を使用した。また、調査時期を3期に分け、5・6月をⅠ期、10・11月をⅡ期、1・2月をⅢ期とした。子どもが色を塗った紙の総数は、子ども20名×3枚×6ヶ月の、計360枚である。

**(2)情動に関する言語表現**

子どもが紙に色を塗った際に、なぜその色を選んだのかを保育士が尋ね、回答の内容を記録した。回答内容は、「情動に関する発言」、「情動以外の発言」、「発言なし」に分け(図1)、それぞれの回答数を調べた。「情動に関する発言」は、例えば、「楽しい気持ち」や「悲しい気持ち」など、情動を直接表す単語を含んでいるものとし、「疲れた気持ち」「眠い気持ち」など、情動を直接表す単語を含んでいない発言は、「情動以外の発言」とした。さらに、「情動に関する発言」は、「ポジティブな情動」、「ネガティブな情動」、「その他の情動」に分け(図1)、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期におけるそれぞれの回答数を調べた。

**(3)情動が生じた「理由」**

情動に関する言語表現に関して、子どもが自分の気持ちを説明した際に、なぜその気持ちになったのかを保育士が尋ね、回答の内容を記録した。回答内容は、子どもが、情動が生じた「理由」を述べた回答と、「理由」が述べられなかった回答に分け(図1)、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期におけるそれぞれの回答数を調べた。

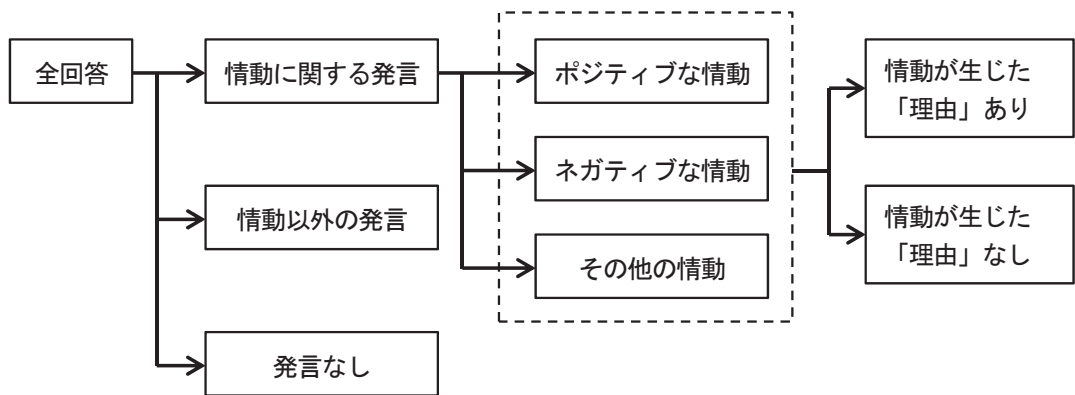


図1 回答の分類

**Ⅲ. 結果**

**1. 使用されていた「色」について**

子どもたちが情動を表すために使用していた「色」は全部で16色であった。表1は、それぞれの色が使用された絵の枚数と全体における割合を示している。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を通して、情動を表す色として最も多く使用されていた色は「水色」で全体の13.6%であった。2番目に多く使われていた

色は「赤」で12.8%、3番目に多く使われていた色は「青」で11.4%であった。

表1 使用されていた色の数と割合

色	水色	赤	青	黄色	紫	オレンジ	黄緑	緑	白
枚数	49	46	41	39	34	27	24	18	17
%	13.6	12.8	11.4	10.8	9.4	7.5	6.7	5.0	4.7
色	黒	灰色	ピンク	こげ茶色	おうど色	パールオレンジ	茶色	回答なし	合計
枚数	16	14	13	7	6	4	4	1	360
%	4.4	3.9	3.6	1.9	1.7	1.1	1.1	0.3	100.0

また、実際に子どもたちが使った色と保育士が記録した発言内容の例を以下に示す(図2)。①「たのしいきもち(赤)」(ポジティブな情動:理由なし), ②「ポケモンGoをやれてあかるいキモチ(黄色)」(ポジティブな情動:理由あり), ③「ゆきでそとにいけなくてかなしいキモチ(黒)」(ネガティブな情動:理由あり), ④「ねむいキモチ(青)」(情動以外:理由なし)など、様々な表現が見られた。

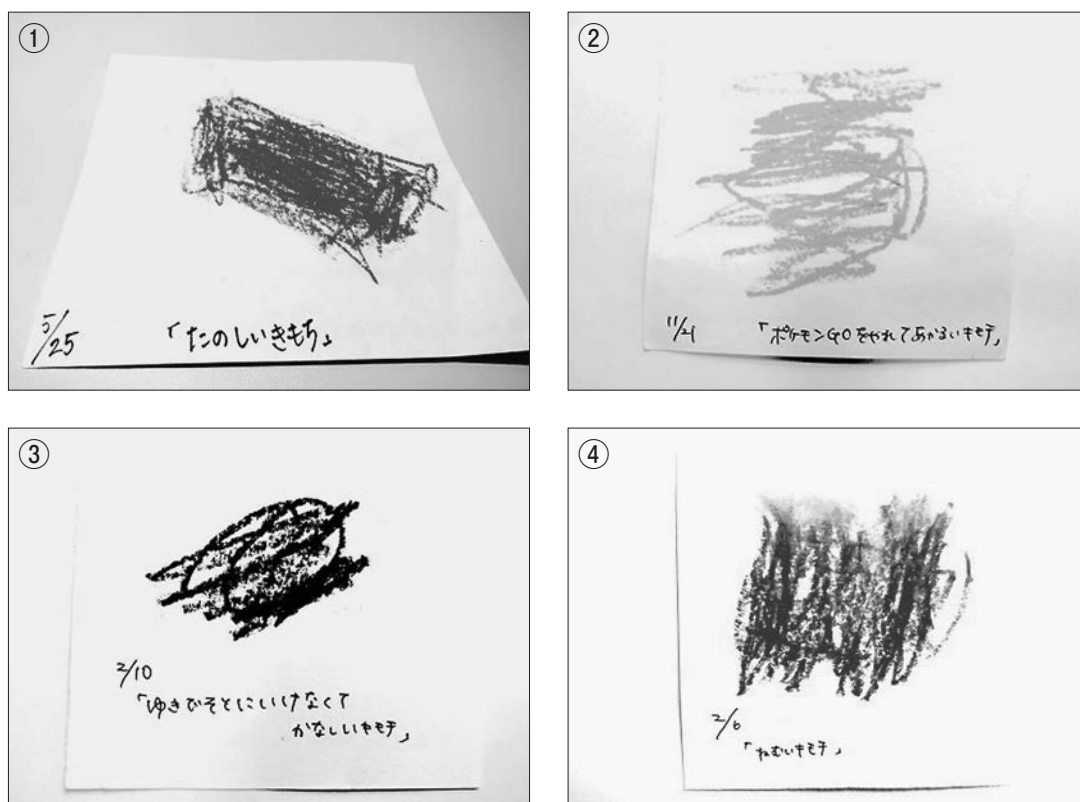


図2 紙とクレパスを使った表現の回答例

## 2. 色と情動の関係について

色と情動の関係について検討を行うため、それぞれの色の情動ごとの使用数および割合を表2に示す。情動に関する全243の発言のうち、ポジティブな情動の割合は81.1%、ネガティブな情動の割合は14.4%であった。

表2 各色が使用された情動の内訳(括弧内は割合)

	ポジティブな情動	ネガティブな情動	その他情動	合計
水色	29 (78.4)	8 (21.6)	0	37
黄色	32 (94.1)	2 (5.9)	0	34
赤	30 (96.8)	0 (0.0)	1	31
青	22 (71.0)	6 (19.4)	3	31
紫	17 (81.0)	4 (19.0)	0	21
黄緑	14 (73.7)	3 (15.8)	2	19
オレンジ	15 (88.2)	1 (5.9)	1	17
緑	9 (81.8)	1 (9.1)	1	11
ピンク	10 (100.0)	0 (0.0)	0	10
白	8 (80.0)	1 (10.0)	1	10
灰色	4 (44.4)	5 (55.6)	0	9
黒	2 (33.3)	3 (50.0)	1	6
パールオレンジ	3 (100.0)	0 (0.0)	0	3
こげ茶色	1 (50.0)	1 (50.0)	0	2
おうど色	1 (100.0)	0 (0.0)	0	1
茶色	0 (0.0)	0 (0.0)	1	1
合計	197 (81.1)	35 (14.4)	11	243

### (1)ポジティブ情動と色

ポジティブな情動を表現する際に使用されていた色として最も数が多かったものは「黄色」、2番目に多く使用されていた色は「赤」、3番目に多く使用されていた色は「水色」であった。また、各色について、ポジティブな情動に用いられた割合が全体の平均(81.1%)よりも高かった色は、「ピンク」(100%)、「パールオレンジ」(100%)、「おうど色」(100%)、「赤」(96.8%)、「黄色」(94.1%)、「オレンジ」(88.2%)、「緑」(81.8%)であった。

### (2)ネガティブ情動と色

全体を通して、ネガティブな情動を表現する際に使用されていた色として最も数が多かったものは「水色」であった。2番目に多く使用されていた色は「灰色」、3番目に多く使用されていた色は「青」であった。各色について、ネガティブな情動に用いられた割合が全体の平均(14.4%)よりも高かった色は、「灰色」(55.6%)、「黒」(50.0%)、「こげ茶色」(50.0%)、「水色」(21.6%)、「青」(19.4%)、「紫」(19.0%)、「黄緑」(15.8%)であった。

### 3. 情動の言語表現について

#### (1) 情動に関する発言数

I期, II期, III期における「情動に関する発言」, 「情動以外の発言」, 「発言なし」の回答数を表3に, それらの割合を図3に示す。I期, II期, III期を通じて情動に関する発言は60%以上であった。情動に関する発言数は, III期で最も多く, II期で最も少なかったが,  $\chi^2$ 検定による有意差は見られなかった ( $\chi^2(4, N=360) = 4.91, n.s.$ )。情動以外の発言で多く使用されていたのは「眠い気持ち」 「ぼーとした気持ち」であった。

表3 各時期における発言数

	I期	II期	III期
情動に関する発言	83	74	86
情動以外の発言	35	45	34
発言なし	2	1	0

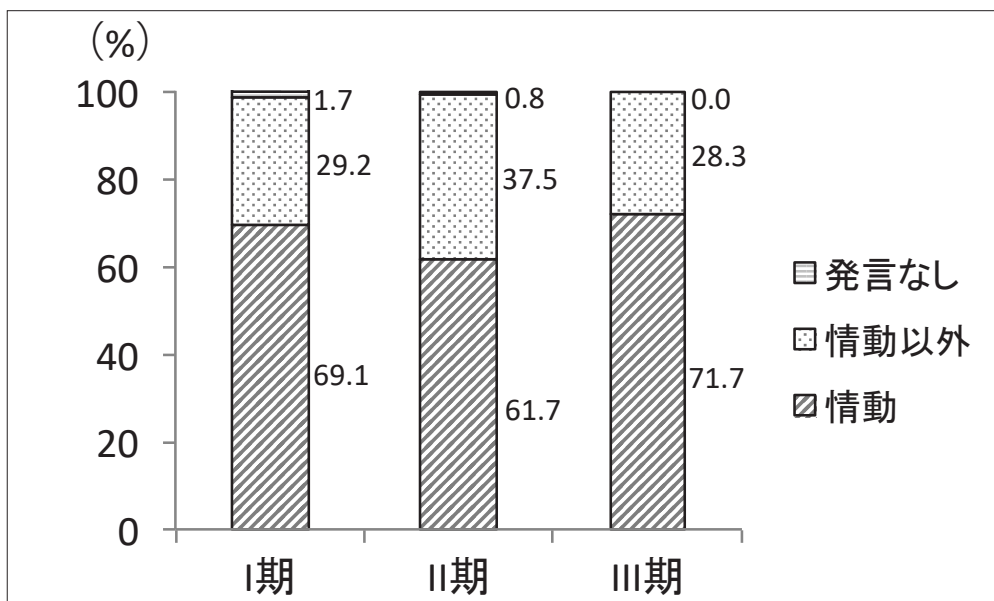


図3 各時期における発言数の割合

(2)情動の種類別の発言数

情動に関する発言について、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期における「ポジティブな情動」、「ネガティブな情動」、「その他の情動」の回答数を表4に、それらの割合を図4に示す。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を通じて「ポジティブな情動」に関する発言が最も多かった。 $\chi^2$ 検定の結果、Ⅱ期における「ネガティブな情動」に関する発言が有意に少なく、Ⅱ期における「ポジティブな情動」に関する発言が有意に多かった( $\chi^2(4, N = 243) = 9.66, p < .05$ )。

ポジティブな情動では、「うれしい気持ち」「楽しみな気持ち」「楽しい気持ち」「明るい気持ち」などが多く発言されていた。ネガティブな情動では、「悲しい気持ち」「いやな気持ち」が多く発言されていた。

表4 各時期における情動に関する発言数

	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
ポジティブな情動	63	67	67
ネガティブな情動	17	3	15
その他の情動	3	4	4

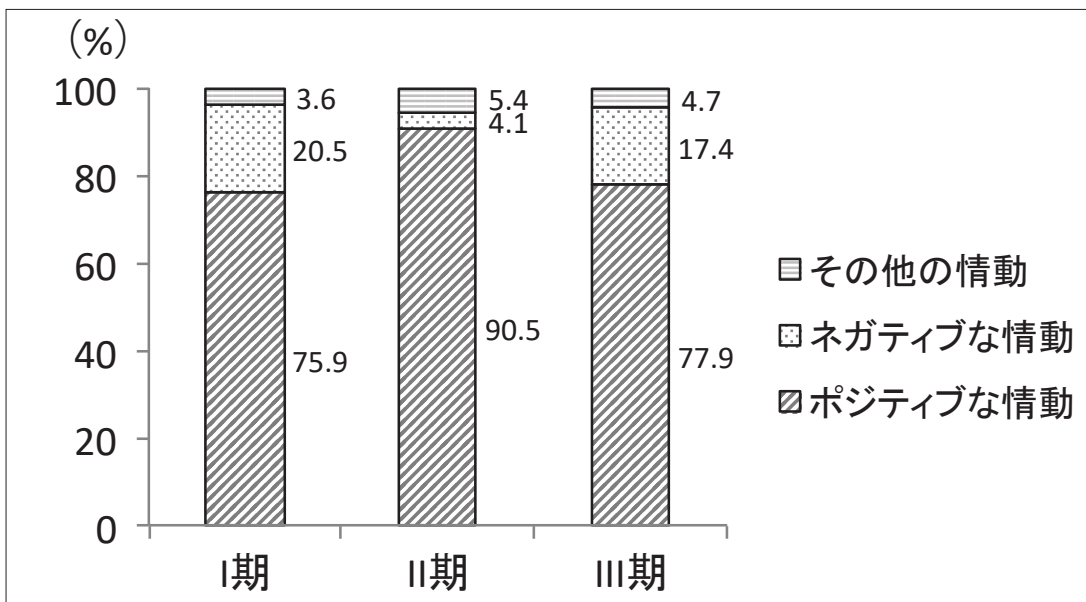


図4 各時期における情動に関する発言数の割合



#### 4. 情動が生じた「理由」について

子どもたちの「情動に関する発言」について、なぜその情動が生じたかといった「理由」があった発言数および、「理由」がなかった発言数を表5に、それらの割合を図5に示す。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を通して、「情動に関する発言」のうち、「理由」が述べられていた割合は、67.9%であった。 $\chi^2$ 検定の結果、Ⅲ期の「理由あり」およびⅡ期の「理由なし」が有意に多かった( $\chi^2(4, N = 243) = 9.66, p < .01$ )。

ポジティブ感情における理由では、「○○と遊んだから、たのしい気持ち」「○○に行くから、うれしい気持ち」「○○をしたから、楽しい気持ち」などといった発言が多くされていた。ネガティブ感情における理由では、「遊べなかったから、悲しい気持ち」「○○に怒られたから、いやな気持ち」などといった発言がよくみられた。

表5 各時期における情動が生じた「理由」に関する発言の数

	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
理由あり	50	36	79
理由なし	33	38	7

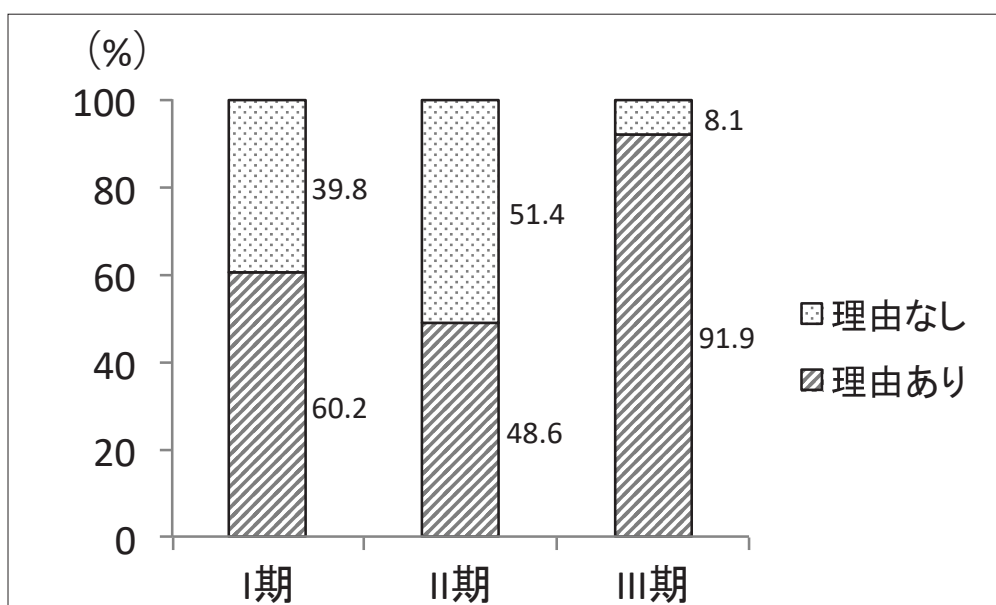


図5 各時期における情動が生じた「理由」の割合

## IV. 考察

最初に、全期間を通して使用された色と表現された情動の結果に基づき、考察する。次に、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期それぞれにおける情動の言語表現の変化を通して、子どもたちの情動の表現がどのように変化したかについて考察する。

### 1. 色と情動表現について

全体を通して、ピンク、黄色、赤、オレンジなど、「明るい色」ではポジティブな情動の割合が8割以上あり、灰色、黒、こげ茶色など、「暗い色」ではネガティブな情動の割合が約半数を占めた。これは、Boyatis & Varghese (1994) が、5歳児に異なる9色を順番に見せて、連想する情動を答えてもらった際に得られた結果(ピンク・赤・黄色・青・紫・緑はポジティブ情動、茶色・黒・灰色はネガティブ情動を連想する傾向)と同様の結果である。しかし、Crawford et al. (2012)の研究でも示されていたように、「明るい色」でもネガティブな情動表現をしたり、逆に、「暗い色」でもポジティブな表現をしたりする子どももあり、必ずしも、色-情動の一对一の単純な対応関係があるわけではない。また、同じ子どもでも、その日によって、同じ色で別の情動を表現している場合もあり、本研究においても、20枚中9枚に水色を用い、ポジティブ・ネガティブ両方の情動を表現している子どももいた。子どもは単に「自分が好きな色を使って絵を書いている」ことも多く(中道・小野寺, 2017)、使用している色から、安易に情動を推測しようとすることは、少なくとも幼児期に関しては、難しいと言えるだろう。

### 2. 情動の言語表現の変化について

Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を通して、情動に関する発言の数はⅢ期が最も多かったが、割合はおよそ6、7割で推移しており、大きな変化は見られなかった。また、ポジティブな情動に関する発言は、Ⅱ期で約9割を占めるなど、総じて8割前後の高い割合であり、ポジティブ情動が7割を占めた Boyatis & Varghese (1994)の研究をはじめとする、幼児の色を通した情動表現はポジティブなものが多いという先行研究と同様の結果となった。幼児期後期には、情動を表出することによる否定的な影響を理解し、ネガティブな結果の回避や相手への配慮がネガティブな情動表出を抑制する動機になる(平川, 2009)。さらに、たとえば、特定の情動を喚起する映像を観る際に、映像を1人で視聴する場合よりも2人で視聴する時の方がネガティブな情動が抑制される(中澤, 2010)ということからも、5歳児は、特に、保育所のような他者の存在・関わりが多い場面においては、ネガティブな情動を抑制し、ポジティブな情動を積極的に表出している可能性がある。

情動に関する発言数、ポジティブ・ネガティブな情動の発言数やその割合については、Ⅰ～Ⅲ期を通じて大きな変化は見られなかったが、情動が生じた「理由」については、Ⅰ期、Ⅱ期に比べて、Ⅲ期が多かった。これは、色や言葉で自分の情動を表現する9ヶ月間の活動が、情動が生じる背景や理由への気づきを促した結果であると考えられる。これに関連して、本郷ら(2017)は、絵カードによる仮想場面を用いた「うれしさ」「いかり」などに関する情動表現課題を複数の保育所の幼児を対象に行った。その結果本研究の対象児は、特に情動表現に特化した活動を行っていない別の保育

所の子どもよりも、情動が生じた背景やその理由についての言及数が多かったという結果を得た。この結果からも、この保育所で行われていた情動表現に関する活動が、「慣れ」のような、その活動の中だけでの効果だけでなく、情動表現自体の発達、特に、情動が生じた背景や理由を表現する能力の獲得に影響を及ぼしたと考えられる。

しかし、本研究には限界もある。保育所では、通常の保育の中においても、他児や保育士との関わりの中で、子どもたちが情動を表現する経験はあり、情動が生じた背景や理由への言及数の増加が、今回の情動表現活動のみによって得られたものとは言い切れないところがある。したがって、今後、保育現場における様々な情動表現活動や、通常保育の中での情動表現場面が子どもの情動表現に及ぼす影響について検討していく必要があると考えられる。

### 【参考文献】

- Boyatzis, C.J., & Varghese R.V. (1994) . Children's emotional associations with colors. *The Journal of Genetic Psychology*, 155(1), 77-85.
- Crawford, E., Gross, J., Patterson, T., & Hayne, H. (2012) . Does children's colour use reflect the emotional content of their drawings? *Infant and Child Development*, 21, 198-215.
- 平川久美子 . (2009) . 児童期初期における情動表出の制御の理解に関する研究：主張的動機に着目して . 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57(2), 219-238 .
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子 . (2010) . 「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究 . 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 121-133 .
- 本郷一夫・大淵守正・松本恵美・山本 信・小玉純子 . (2017) . 幼児の情動理解と情動表現の発達に関する研究：情動の言語表現に着目して . 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 66(1), 印刷中 .
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 . (2003) . 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 . 発達障害研究, 25, 50-61 .
- 黒木隆大・長井志江・堀井隆斗・池田尊司・熊谷晋一郎・浅田稔 . (2015) . 色－情動の対応関係を用いた自閉スペクトラム症者の他者情動認識支援 . *The 29<sup>th</sup> Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence*, 1-4 .
- 中道直子・小野寺めぐみ . (2017) . 幼児～大学生は「喜び」「悲しみ」「怒り」を表すために何色を使うか？ *日本発達心理学会第28回大会論文集*, 621 .
- 中澤 潤 . (2010) . 幼児における情動制御の社会的要因と文化的要因：情動の表出制御の状況比較および日米比較 . 千葉大学教育学部研究紀要, 58, 37-42 .
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L., & Witherington, D. C. (2006) . Emotional development: Action, communication, and understanding. In N. Eisenberg, W. Damon & R. M. Lerner (Eds.) , *Handbook of child psychology: Vol. 3, Social, emotional, and personality development (6th ed.)* (pp. 226-299) . Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Zentner, M.R. (2001) . Preferences for colours and colour-emotion combinations in early childhood. *Development Science*, 4(4), 389-398.

# The Study of Expression of Emotional States in Young Children: Expression by Colors and Language

Kazuo HONGO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Emi MATSUMOTO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Makoto YAMAMOTO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Kazuko NAKADATE

(Director, Nishitaga Cherry Nursery School)

Kazumi ABE

(Nursery Teacher, Nishitaga Cherry Nursery School)

The purpose of the present study was to examine how young children's emotional expressions changed through the activities to express children's own emotions using colors and language. Subjects were 20 five-year-old children in a nursery school. The main results were as follows: (1) Five-year-old children expressed positive emotions more than negative emotions. (2) Five-year-old children tended to express positive emotions using bright colors and negative emotions using dark colors. However, there were no distinct color to emotion correspondence. (3) Through the activities to express own emotions, five-year-old children had acquired the ability to explain the contexts and reasons of emotions verbally.

Keywords : emotional expression by language, emotional expression by colors, contexts and reasons of emotions, young children

